

心理的距離における能動表象

——その現象学的接近——

山 根 一 郎*

Active Representation in Psychological Distance.:
its Phenomenological Approach.

Ichiro YAMANE

1. 心理的距離はいかに経験されているか

対人関係を営んでいる他者との間で自己が経験する(その他者に対する)心理的距離は、空間的距離とは異なり、一義的な値をとらない。なぜならそこでの心理的距離(以下必要に応じて「距離」と略記)経験は、自己から他者への能動方向のものと他者から自己への受動方向の距離とが異なり、また対面場面で表出されるものと非対面時にも経験可能な表象されるものとの間でも距離が異なるからである(山根, 1987, 2005)。むしろ、これらの相異なる心理的距離の4側面、すなわち能動表象(的距離。以下同)、能動表出、受動表象、受動表出の4種が別個の距離の値として経験可能であることを前提とし、これらの間の距離の不一致の度合いによって、対人関係上で経験するさまざまな心理的トラブルを説明できることを示した(山根, 1995, 2005)。このように筆者は、心理的距離という現象を構造的にモデル化する作業に取り組み、そのモデルでいかに対人関係をリアルに説明できるかを優先したため、心理的距離を尺度化する作業は後回しにされた。

その結果、まったく閑却されていた問題に気づいた。それは、心理的距離の不一致の経験が可能であるということは、特定他者に対する表象距離と表出距離の距離間の照合が可能であるという前提に立っていることである。そして、さらなる前提として、内的に表象される距離と、行動によって表出される距離との距離としての照合が可能ということは、まずは心理的距離が(表出行動と照合可能な程度に)明確な距離値として表象可能でなくてはならない。すなわち距離はかなり精緻に表象されるはずである、と前提されていた。「前提」されるということは、それが明示的に確認されるべき事項かどうか不問に付されていることである。このように、心理的距離の最も基礎的な側面である能動表象がどのように経験されるかが問われてこなかった。筆者は「現象学的アプローチ」を標榜しているが、そうであるなら暗黙視されている(分ったことになっていて問われることのない)

* 人間関係学部 心理学科

前提を問わずに探求が成り立つことはない。なぜなら、現象学が眼を留めるのは、通俗的了解のままで学的に問うことを素通りしている身近すぎるほど慣れ親しんだ現象だからである。その素通りされた現象こそが、学的に探求したいその先の現象を基礎づけ、その存在を可能にしているからである。能動表象は、まさにその現象であった。

そこで本稿では、心理的距離における能動表象的距離が、表象主体にとってどのように経験されているのか、現象学的表現を使えば、どのように「現れ」ているのかを問題にする。そもそも能動表象は、自己にとって任意な場面で内的・直接的に経験される、最も身近な心理的距離で、通常、尺度形式で測定される心理的距離はこれに該当する。その能動表象は筆者において「自分自身の相手に対する自覚された心理的距離」(山根, 1995), 「自分自身の内なる相手に対する心理的距離」(山根, 2005) と抽象的な表現で規定されただけで、特定の他者に対する能動表象がどのように具体的に現れているかは言及されてこなかった。すなわち(現象学的態度で)モデル化した筆者自身においても、能動表象は通俗的了解のまま自明視されてきたのである。

1.1. 表象とは

まず本稿でいう「表象」という概念を明確にしておく。現象学の祖 E. Husserl (1922) は、表象を「志向的对象への知覚的・想起的・想像的・模写的・表示的志向」としている。一方、心理学では、一般に、表象は知覚や表示という外的反応とは区別され、内的想起や想像に限定される(たとえば『心理学事典』平凡社)。筆者のモデルでは、心理学的用法にしたがい、「表出」(外的反応)に対立する内的反応という意味で使っている。すなわち、他者へ向って行動として自他双方に表示されたもの(能動表出)ではなく、また眼前の他者の行動を知覚したもの(受動表出)でもない。対象の知覚を必要とせずに内的に経験されたものであり(能動表象), 行動(表出)を解釈したものである(受動表象)。すなわち、表象は行動や知覚という眼前のリアルな他者経験ではなく、非眼前の内的他者経験である。表象は、現象学では「現出」(現れ)の主要な1様式であるが、知覚的現出(たとえば受動表出が相当)と異なり、他者の知覚的現前(=眼前)に左右されない。すなわちリアルな現前とは別個の現れである。

本稿での表象概念は、対象の内的現前であり、現象学では「準現前」「再現前」と表現される表象の主要様式の1つ「想起」に近い。両者はともに非眼前的現出であること、任意に経験可能なためである。ただし本稿でいう表象(的距離)が記憶現象としての想起(再生)と異なるのは、過去の特定の対面場面(相互表出)の記憶に限定されず、複数の記憶によって合成された距離値であり、また他者の視覚像を伴うにしても視覚像そのものではない点である(ただし、これはあくまで理念的規定であり、実際に人はこのように表象しているのかどうか探る必要がある)。もっとも表象の本質は準現前性よりも任意性の方にある。その任意性によって非対面でも現れうるということであり、いいかえれば対面状況でも(表出と表象のズレとして)経験可能である。

ちなみに、距離経験の過程をより微細(=現象学的)にみるなら、コミュニケーションが進行する対面場面においては、行動としての能動表出に先立って、その意味的根拠となる能動表象は必ずしも自覚的に経験されるわけではない(時間的余裕がない場合)。むしろ自覚できる表象になる以前の(したがって半ば無自覚・無意識的な)、表出の直接の

根拠となる表象過程の存在が想定される（それを想定しないと、表出は内的な何かの表出ではなく、外部刺激に対する反射反応になる）。その表象（この場合の表象はHusserl的な広義）を筆者は「原表象（presentation）」とし、一方、非対面で任意に経験できる自覚的な表象、いわゆる能動表象としての表象を、原表象を表象するという意味で「再帰的表象（re-presentation）」と名づけて区別を試みた（山根, 2013）。原表象は表出の意味的根拠として表出と一体となった心理的距離経験であり（いわゆる知覚表象）、表出と別経験される能動表象（再帰的表象）とは距離の値が異なりうる。いいかえれば、「ズレ」（表出と表象間の距離の差）は、表出による表象距離の偽装・隠蔽という演技的操作だけでなく、再帰過程の繰りかえしによって原表象との差が拡大した能動表象によることも考えられる。ただし原表象は表出に直結する概念であるため、能動表象（再帰的表象）を主題とする本稿では扱わない。

1.2. 心理的距離の表象経験

能動表象（的距離）はいかに現れるか。距離はどのように“表象”されるのか。たとえば、対面状況でない他者への評定尺度上での反応を能動表象距離とするなら、その反応、その距離値はいかなる表象によって根拠づけられているのか。まずは現象学の論理を使って説明を試みる。

能動表象、すなわち特定の他者との心理的距離を心の中で再経験することは、意識現象の1つである。現象学によれば、意識は何ものかについての意識、すなわち志向現象である。志向現象は、志向対象（ノエマ）と志向作用（ノエシス）の組合せとされる。

能動表象において、まずは距離対象である特定の他者を表象する必要がある。その表象された他者は志向対象（ノエマ）である。そしてその時、他者に対する心理的距離はどのように経験されるか。能動表象が問われた場合、問われた者はどのような表象をすればよいのか、ここで問題なのは、他者ではなくその他者に対する距離を志向対象（ノエマ）化するよう要求されている点である。それゆえ、その距離を意識に表象しなければ回答できない。ではその心理的距離は、距離を回答する主体にどのように現れるのだろうか。可能性として、次の2通りが考えられる。

①他者とともにノエマとして表象される：すなわち、他者が距離を備えて現れていることであり、他者の現れに距離の現れが含まれている。これは視覚的距離経験とほとんど同じ現象で、J. J. Gibson (1979) が主張するように対象までの距離は視野の諸情報において見えていることになる。

②他者が距離（ノエシス）を通して表象される：すなわち、距離は他者を表象することで経験されるが、他者と同時に経験対象にはなりにくい。他者を見ている時、距離は透明化されて表象されにくい。「距離は透明だから見えない」と主張したG. Berkley (1948) のな距離経験である。

上の2つの可能性それぞれに問題が発生する。まず①「距離は見える」については、他者表象において距離が同時に体験できるなら、志向対象の他者像のどこに距離の手がかりがあるのだろうか。空間的距離のように他者像以外の地（ground）的な表象が距離の情報を担っているとすれば、それは具体的にどの表象なのか。また②「距離は見えない」については、距離は他者表象では対象化されないならば、他者表象だけでは自分の心理的距離

の値を評定したり、さらには能動表象として他の側面と照合することもできないはずである。距離（ノエシス）をノエマ化するという非日常的な現象学的反省作業をしないかぎりには。逆にいえば、日常的態度のままでは、われわれは心理的距離の評定はできないはずである。

1.3. モデルからの記述

本稿の問題は、筆者の心理的距離モデル（以下「モデル」）では、どのように説明できるのか。モデルでは、心理的距離を構成する意味空間を「個別性」と「共同性」との2次元に想定している（山根, 1995, 2005）。この2次元性はGibsonに負ったのではなく（モデル構築当時は彼の理論を知らなかった）、志向現象をノエマとノエシスとに分解する現象学に依った。個別性はノエマに相当し、空間距離における見えの大きさに相当する。心理的距離としては、相手そのものの情報量（相手の存在感）、その人を知っている度合いを意味する。共同性は、ノエシスに相当し、空間距離における自他の足下の地面の隔たりに相当する。心理的距離としては、自己との共通性、相手の諸属性の受容可能性を意味する。いわゆる「親密感」に近いことから、能動表象として評定される距離は、個別性よりも共同性の方により強く相関があると予想できる。ただし、共同性はノエシス的であるがゆえに、個別性に比べて表象対象となりにくく、その点で自分自身でも捉えにくいはずである。

個別性と共同性の2次元をGibson的に網膜像の2次元平面とするなら、すなわち視覚的距離と心理的距離感の“距離”経験としての構造的相同性を仮定するなら、個別性と共同性がそれぞれ経験されれば、他者に向けた志向（視野）に距離が見えることになる。いいかえれば心理的距離は、個別性と共同性の経験として直接「現れる」と予測される。ただし視覚的距離との対応として、個別性は他者の“大きさ”，共同性は他者との“隔たり”として現れるとされ（山根, 1995, 2005）、現れの経験様式が互いに異なるので、実際の距離の現れは、そのどちらの経験様式に対応するのかを確認する必要がある。

さらに、能動表象に影響を与える別の現象もある。対人関係を営んでいる他者への心理的距離を評定する場合、能動と受動、表象と表出の間には、相互に距離の差を減らす力が作用しているとモデルでは仮定している。たとえば、 n 時の能動的距離は、 $n-1$ 時の受動的距離値の影響を受けている（その値に近づけられる）。 n 時の受動的接近が受容可能であれば、 $n+1$ 時の能動的接近を促す。これを「距離の相互性」という（山根2013）。

1.4. 目的

以上は、能動表象の現れにおける理論的説明と予想であるが、それが現実に経験されているかどうか確認するのが本稿の目的である。

そこで協力者を用いて能動表象経験をさせ、それを報告させる調査を以下に実施した。ただし協力者は現象学に馴染がないため、調査1では素朴な内省報告ですませ、調査2では受動表出経験の調査を試み、調査3で心理的距離のモデルと現象学の基本概念を解説した後、現象学的な反省にもとづく内省報告をさせた。

2. 調査1：近い他者表象の素朴な内省

近い他者への能動表象を非眼前で経験させ、その内容をそのまま記述させた。

2.1. 方法

質問紙上で、特定の近い他者に対する心理的距離を評定させ、ついでその回答の際の表象経験を自由記述で回答させた。まず「特定の近い人(たとえば母親)を思い浮かべ、その人への心理的距離(親密感)として最も適していると思われる位置として、自分自身とアカの他人との間の線分(－の部分)に○印をつけてください」と紙面によって指示した。回答欄には長さ2mmの15個の線分が1mmの隙間をはさんで等間隔からなる線を記し、その左端の線分に「自分自身」、右端の線分に「アカの他人」と記した。すなわち1次元の(本来的には無限の)距離空間を有限の線分とし、自己を原点として、等間隔で15に分割した。分割数を15とした理由は、量的距離感と質的判断との双方を満たす、細かすぎず粗すぎない程度として適当な区分量(通常の評定尺度の2倍以上)と判断したためである。心理的距離はその定義上、比率尺度であるから、原点(0)と単位距離(1)の明確化が必要である(山根, 2012)。本調査では原点は「自分自身」と明記したが、自己とアカの他人の間を均等に14分割しただけなので、単位距離については全距離空間の1/14という相対的な意味に留まっている。

次に、「上問の回答中、思い浮かべた人への心理的距離は、あなたの心の中にどのように現れてきましたか。その過程を思い出し、あるいは再び経験しながら、できるだけ詳しく記してください」と問い、自由記述させた。回答の際に、同一対象への表象は繰り返しかえし可能であると口頭で指示した。

協力者：女子大学院生7名(20-60代)。大学院生を選んだのは、回答に際して十分な内省力と記述力を期待したためである。授業を利用した調査であったため、勤務先の都合で女性に限定された。また後続する調査と照合するため、記名回答とした(以下、同)。全員の回答の様子を教卓から観察した。

2.2. 結果

a) 距離の評定

距離の線分への回答を数値化するため、自分自身を0、アカの他人を14として、その間の13個の線分に1-13の整数を充てた。ただし1名の回答者は、調査1と3の回答において、数値2と3の間に○印を記入したことから(調査2ではそうでない)、その回答は2.5とした(距離の線分は15よりもさらに細かい分割がよかったのかもしれない)。

教卓から観察したところでは、この問いには全員時間をかけずに回答し、時間を要したり書き直す様子はなかった。すなわち、特定他者を表象してその他者に対する距離感を有限の線分上で回答することは容易といえる。回答の平均値は2.8(Sd=1.35, 最小1, 最大5)であり、自分自身を0、アカの他人を14とした場合の値として自分側にかなり近い数値といえる。

b) 表象内容

表象過程の言語的変換を容易にするために、線分を回答した時の表象の記憶に限定せず、自由記述のために表象の任意の再現を口頭で許可した。したがって、得られた記述は、幾度も表象を遂行した結果とみなす。

回答に至る心理過程を順序立てて記述したものがあり、回答時の表象過程の例として以下の「 」内に記す。

「まず最初にアカの他人と自分の距離を目で測った（線分の距離）。次に、アカの他人を心の中でイメージした。特定の親しい人を心の中でイメージした。その人の日常の経験における、具体的なやりとり（言語的、非言語的の両方）を思い浮かべた。やりとりには肯定的な、また反対に否定的なものがあると認識した。線分のどこに○をつけようかと決定するには、肯定的、否定的な経験の比率が関連していると思った。」

この回答例から、アカの他人との比較（相対化）によって線分上の位置が決定される過程が示されている（同じ回答が他に1名）。すなわち回答用の例示が準拠点とされたわけで、他者への絶対的距離が表象されているわけではないことがわかる。また対象者との具体的なやりとりが判断基準になっており、しかもある期間の複数の肯定的経験と否定的経験（前者は距離を縮め、後者は距離を拡げるものであると、回答者から確認）から合成されたものであることがわかる。

上も含めて、すべての回答は心理的距離がどのように現れているかではなく、「微笑んでいる」というような他者像あるいは他者とのコミュニケーション場面の現れの記述であった。

また近さの“根拠”をあげた回答が目についた。たとえば、「よく知っている」からという個性の効果があげられ、一方、共同性（自己との共通性・受容性）の効果とみなせるのは、「考え方が近い」、「大きく影響を受けている」という記述であった。判断基準として、接触頻度をあげたのが2名いた。これを単純接触効果とみなすと、認知的馴化によるものであり、個性的情報量の効果ではなく、共同性的受容性の効果ということになる。また、「いつでも心の端に存在している」「何の抵抗もなく思い浮かんだ」と、想起のしやすさが心理的“近さ”と関係していることが示唆された。さらに相互に近いことをあげていたのが2名いた。これは受動距離も関係としての心理的距離に影響することを意味する（心理的距離における能動距離と受動距離を分離していない段階である）。ついでに、いくら近い他者であっても距離0が理想ではないという指摘が2名いた。

c) テキストマイニングによる結果

自由記述の回答はどうしても例示の選択基準が恣意的になり、すべての回答を対等に扱うことが難しい。そこですべての記述を対等に評価するため、「トレンドサーチ2008」(SSRI ソフトウェア)を使ったテキストマイニング、すなわち記述を単語レベルに分解して、回答者間の文としての連関性を定量化した結果を示す(図1)。ちなみにテキストを分析用データとして単語化する際、元の記述の漢字を統一し、また指示代名詞や「ある」「する」などの非限定的な動詞は分析から除外した。マッピングは、出現頻度とばらつきによって計算された“重要度”にもとづき、互いに近いまたは太い線で結ばれた語が文として連結されている度合いを示す。使用されている語から、対象となる他者との具体的なやりと

心理的距離における能動表象

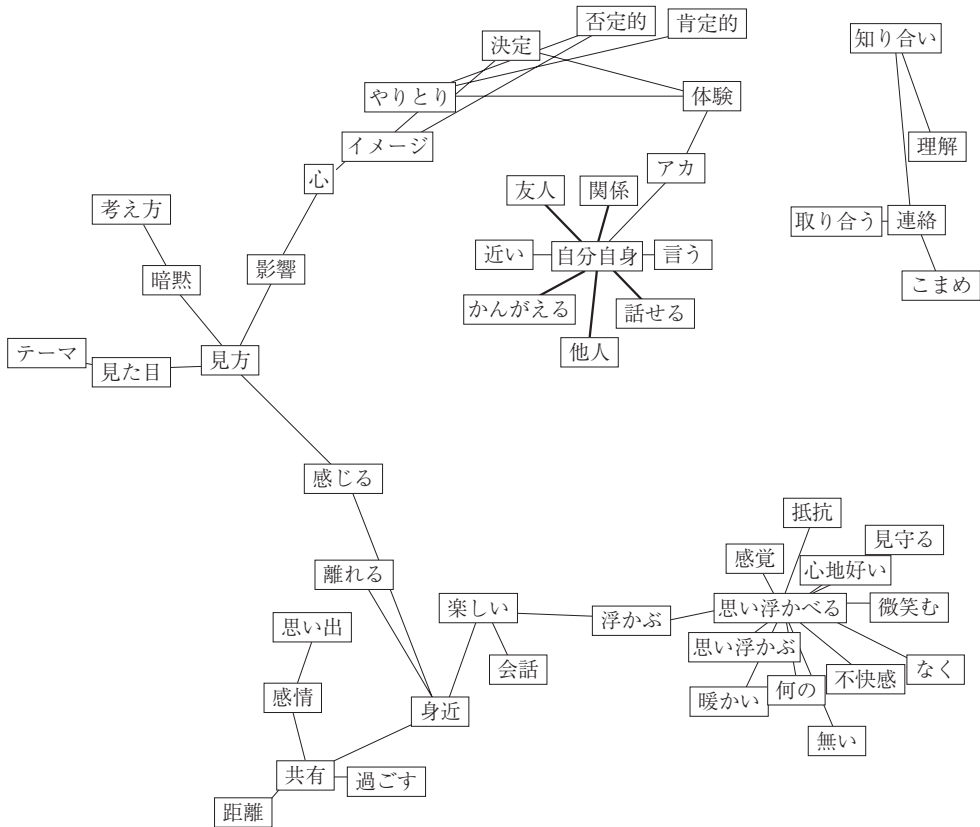


図1 調査1の自由記述の重要度マップ
(項目が重ならないよう距離は調整してある)

りが想起できるようである。

記述から、回答者が思い浮かべた近い他者は、ただ近いだけでなく、その近さが快適であることがうかがわれた。

2.3. 考察

自由記述をそのまま素直な表象過程とみなすと、他者は視覚的に表象（イメージ）されることがわかる（「イメージ」とは姿を思い浮かべることでであると回答者から確認）。さらに個性性、共同性、相互性に言及されているが、それらは距離評定の根拠ではあっても、距離そのものを表現しているとはみなしがたい。結局、“他者がいかに現れているか”は記述されていても、“距離がいかに現れているか”についての記述は1つも見当たらなかった。すなわち、素朴な内省では、他者表象において距離対象と距離が渾然一体となった状態がそのまま記述され、距離対象から分離された距離そのものの現れ（能動表象）を記述できなかった。

ただし、評定時の「現れ」ではないにしろ、その記述内容が評定の根拠を反省した結果であることから、それらを評定の心理的要因とみなすことはできる。能動表象が、過去の

やりとりの想起にもとづくほど、想起される受動表出・受動表象の影響を受け、結果的に相互性が強くなるともいえる。実際、推論されたのは対象の視覚表象にもとづく受動表出（微笑んでいる顔など）であり、またやりとりの相互性によって距離が定められるという記述があった。

3. 調査2：眼前の教員への心理的距離経験

近い他者への能動表象の特徴を探るには、その対比的状況と比較することも意味がある。そこで調査2は、近くない他者の受動表出を眼前的に経験させ、その経験内容を記述させることにする。近くない他者として、教室の講義担当者である筆者自身を選んだ。筆者と受講者7名とはこの授業のみの対面関係であり、うち4名は学部からの筆者の受講経験者であるが、筆者とは個人的接触はまったくなく、残り3名は大学院からの入学者で初回の授業が初対面といえる（調査時は3回目の授業）。

3.1. 方法

質問紙上で、まず「今、目の前にいる私（山根）への心理的距離（親密感）として最も適していると思われる位置として、自分自身とアカの他人との間の線分（-の部分）に○印をつけてください。」と問い、回答は調査1と同じものにした。次に「上問の回答中、山根への心理的距離は、あなたの心の中にどのように現れてきましたか。その過程を思い出し、あるいは再び経験しながら、できるだけ詳しく記してください。」と問い、回答は自由記述とした。

協力者：調査1と同一の7名。調査1の翌週に記名で実施。

3.2. 結果

a) 距離評定

回答者には筆者からの受動表出経験（視線が合ったらにっこり微笑むつもりでいた）による評定を期待したのだが、回答中全員が質問紙に目を落したままで、教卓から眺めている筆者に視線を向ける者は1名もいなかった。これにより、調査2の回答は、眼前の筆者からの受動表出を受けた反応ではなく、協力者の筆者に対する能動表象によると判断する（これは自由記述によって確認された）。

距離の平均は8.9（ $Sd=2.61$ 、最小値5、最大値12）であり、調査1より明らかに遠い距離となったことから（順位和検定で $U=0.5$ 、 $p<.001$ ）、調査1とは能動表象レベルにおける距離の遠近の違いとして比較できる。回答者全員が調査1の他者よりは遠く（自己よりもアカの他人寄り）に評定し、2名をのぞく5名は中央値の7より遠い附置をした。

b) 表象内容

評定の根拠として「アカの他人が基準」、「近い他者との差異」とされ、やはり例示が準拠点になっている。学部での受講経験のある2名が記した視覚表象は、数年前の学部での授業時の想起によるもので、現在の授業の知覚・想起ではない。すなわちここでの能動表象は、眼前対象の受動表出に頼ることをせず、過去における受動表出の想起の方に準拠

している。また、その当時の授業で「親近感をもった」という回答もあり、これは共同性の効果といえる。初対面に近い者にとっては、視覚表象では距離の判断にはならないように、自他の個性性の落差、すなわち「私は先生を知っているが、先生は私を知らない」が判断基準となっており、面識度が「知人」に達しておらず、まだ「知他人」（能動的には知人だが受動的には匿名の他者）段階であることが遠い評価の理由としてあげられた。また相手をどこまで知っているか、という個性性も基準となっている。相互表出経験のなさを2名が挙げており、ここでも心理的距離における相互性が考慮されていた。テキストマイニングによる結果は本稿の中心的議論に用いないため略す。

3.3. 考察

調査2においても対象の視覚像、個性性（の落差）、共同性、相互性が判断材料とされ、調査1と同じ態度で距離の評定がされたことがわかる。近い対象とは異なり、接触経験が乏しいだけにかえて具体的な記憶の想起が頼りになるようである。すなわち能動表象が確固として内面化されていないため、想起された受動表出が参照され、その分、相互性が強くなるようである。表象内容は個性性が中心で、共同性は1名をのぞき考慮するほどの内容が備わっていない。それゆえ相互性も個別性的な対人認知レベルが参照されている。

以上から、調査2においても距離対象への距離の現れの記述は見られなかった。距離の評定基準が回答にあるように多様な要因によるなら、諸要因となるそれらの表象物にもとづく推論によって判断されることになり、距離そのものは現れていない（直接経験されていない）ことになる。そうであるなら、距離の評定は直観的には困難なので、もっと時間がかかってもおかしくない。

調査1, 2を通していえることは、素朴な内省では、日頃透明化している「距離の現れ」を捉えるのが困難なようであった。

4. 調査3：近い他者表象の現象学的反省

調査1と同じ他者に対して、あえて「距離の現れ」に着目させる。そのためには、素朴な内省で終わらずに、内省経験に現象学的な反省を加え、表象された他者に向う自己の経験についての記述を求めた。それを可能にするには、現れた対象（ノエマ）と現れる作用（ノエシス）とを主観的経験の中で区別する視点を獲得する必要がある。そのため実施直前に現象学のノエマ・ノエシスについて講義し、“現れるモノ”と“現れ”そのものとの意識要素としての違いを強調した（「現象学的還元」や「エポケー」などについてはその場では説明しなかった）。そして距離対象ではなく、距離そのものがかいかに経験されているかに着目してほしいと教示した。

4.1. 方法

質問紙で、調査1と同一人物に対する線分上の評定をさせた。次に、思い浮かべたその人の視覚像などのイメージと分離して、距離を思い浮かべることとを紙上で教示し、イメージと同時に経験している事柄の方に注目させるための心的操作として、その人のイメージを除外した残りの経験内容が、漠然とでも心の中に存在しているかないかを2択

で尋ねた。そしてそれぞれの回答に対して、それが「どのように現れているか」と尋ね、自由記述で回答させた。

回答には教示した態度の習得が必要なので、その場で回答させず、1週間後に提出させた（講義内容がどこまで理解されたかについては確認しなかった）。

協力者：調査1と同一の7名。調査2の翌週に記名で実施。

4.2. 結果

回答者は6名で、1名は提出しなかった。

a) 距離評定

調査1と同一対象への評定であり、また日数も2-3週間しかたっていないので、6名中4名は調査1と同じ値であったが、1名は5から4へ、もう1名は3から4へ変化し6名の平均値は2.9 (SD=1.28, 最小1, 最大4) となった。

b) 距離の表象

“残りの経験内容”というものが、漠然とでも心の中に存在しているかという問いには「していない」が1名、「している」が5名だった。

存在していない、すなわち“距離が見える”と答えた者は、「自分から1mくらいの距離で浮かんでいる」と回答した。

存在している、すなわち“距離は見えない”とした者は、距離のかわりに感じたのは「その人の親しみやすさ、暖かさが残っている」、「自分があたたくなるような優しくなるような感覚」、「温かさ、優しい雰囲気が残っている」、「言葉とかその時に感じていた雰囲気とか空気のようなもの」とあり、自己と他者の双方に暖かい雰囲気を見いだしている。

c) テキストマイニングによる結果

調査1と同様な手続きによるテキストマイニングの結果を示す（図2）。同じ対象への評定でも、調査1と使われる単語の違いがあり、以下にまとめてみる。

①共通に使われている：自分自身、思い浮かべる、浮かぶ、感じる、感覚、距離、近い、暖かい、やりとり、体験

②調査1にあって3にない：イメージ、考える、言う、会話、連絡、過す、微笑む、心地よい、楽しい（など）

③調査3にあって1にない：雰囲気、空気、優しい、信頼感、親しみやすい、穏やか、温もり（など）

以上から、調査1では実際のやりとりの再生、共通点の評価や対象像（行動）の記述が主だったが、調査3になると対象への感覚・感情、しかも対象像に対する評価的感情だけでなく、対象像に向う雰囲気的なものへと変化した。これらを表現する単語の出現数は、調査1では「思い浮かべる」が4、「浮かぶ」が3、「感じる」が3個あったが、調査3では「思い浮かべる」は0、「浮かぶ」が1、「感じる」が6個に増えた（調査3では回答者が1名少ない）。実際、「感じる」内容に相当する印象・感覚的表現は、調査1では「楽しい」「心地よい」「暖かい」「親しい」が各1、調査3では「暖かさ・暖かい・温もり」4、「優しい」

2、「親しみやすい」1,「穏やか」1というように調査3の方がかなり増えていた。

4.3. 考察

まず「距離がみえる」とした回答では、距離は対象の視覚表象に付随していることになる。素朴な表象、いいかえれば志向経験の統一性（ノエマとノエシスの結合）を維持した状態である。こう回答した1名は現象学的分離作業という非日常的の行為が苦手であったのかもしれない。あるいは心的内容を空間的に表象することが得意なのかもしれない。逆にいえば、心理的距離尺度上で素朴直観的に回答する時の状況をより詳しく表現しているといえる。「浮かんでいる」ということは、地面に足が着いていないのであるから、Gibson的な距離知覚ではなく、他者像に距離が付随していると見るべきか。「1m」という隔たり

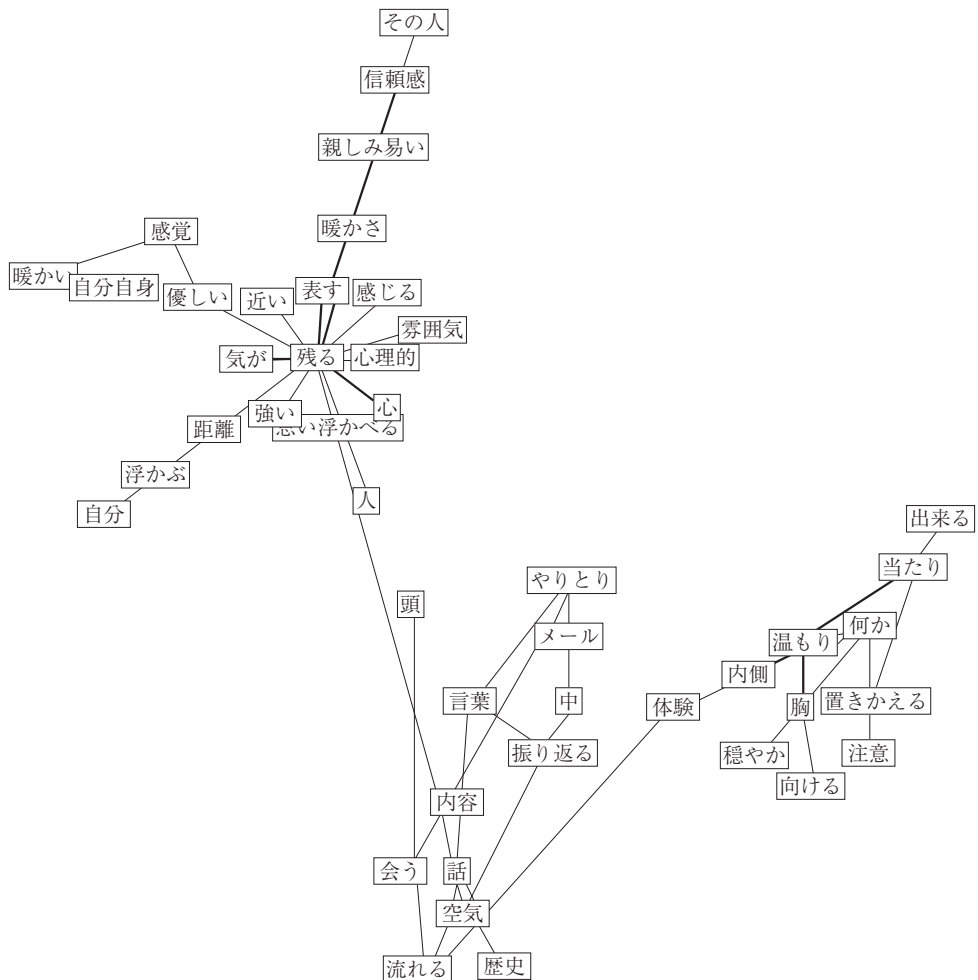


図2 調査3の自由記述の重要度マップ
(項目が重ならないよう距離は調整してある)

は、Proxemics (Hall, 1966) の「個人的距離」に相当し、他者との空間的距離としては最短域ではないが、日常的にいつも傍らにいる領域といえ、対象者(夫)との日常場面での空間的距離の想起かもしれない。この回答者が心的内容を空間的に表象するタイプであるなら、心理的距離が遠い他者は遠方(0に近い見えの大きさ)に表象されるのであろうか(少なくとも調査2ではそうではなかった)。

次に、“距離は見えない”とみなした5名が、他者像を消した残りとして表象したのは雰囲気的なものであった。雰囲気は一般に自己の内在的・内発的感情ではなく、自己と対象の間にある場がかもしれない情感である。その“間”こそ、自己と他者との心理的距離空間に相当する。そして、他者よりも間の方にかかわっているのが、心理的距離の意味次元としての共同性である。その雰囲気の具体的内容は「あたたかさ・優しさ」の類いであった。さらに「あたたかさ、優しい雰囲気を表す感覚が残っている」のは「心理的距離が近いと感じる人ほど、強く心に残る気がする」という回答は、「あたたかさ・優しさ」の度合いが距離の近さと相関していることを示している。「あたたかい(暖かい、温かい)」とは、本来は快適な温熱感を意味するが、対人印象として比喩的に使われており、本件もその用法である。その非温熱的比喩ながら同じ快適性でも「涼しい」と異なるのは、空間を埋める感覚情報の欠如性ではなく、充足性にある(その充足が度を超して不快になると「暑い、暑苦しい」となる)。さらに「あたたかい」と「優しい」とが並列されているのは、そこに意味的共通性があるため(ともに反対語は「冷たい」になる)、その共通性は「気づかない」という、関係における能動的受容性が付与された状況であろう。気づかないとは、他者の“存在(在ること)”への関心・配慮である。

5. 結論

以上の考察をふまえて、能動表象はいかに経験されているかという、本稿で発した問題が、上の調査によってどこまで解明できたか、まとめてみる。

5.1. 距離はどのように現れたか

まず、特定他者への心理的距離を線分で評定することは容易であることから、素朴な表象だけで距離の準定量的(有限な線分)評定は可能であることが確認された。すなわち心理的距離は直観的に現れているとみなせる。ただし、その表象(通常 of 能動表象)過程を素朴に記述させると、すなわちその他者を表象させると、他者像や他者との記憶場面が前面に現れてしまい、直観的に評定された距離そのものの記述に至らなくなる。その結果、距離そのものは不可視化され、自己の直観的評定を説明するために過去経験からの推論がなされる。その推論過程では、対象の個別性、共同性の評価、それらの相互性、受動表出との対応などが根拠とされ、それらは遠い他者に対する能動表象においても同様な基準とされた。

以上をふまえて、能動表象距離の接近過程を記述すると、距離が遠い段階では個別性主体だが(共同性は0に近い)、距離が近くなると、個別性的情報量の増加がほとんどないこともあり、共同性主体となるようである。これを模式的に表現すると、個別性は、距離の遠方相において大きく増大し、一定以上接近するとほとんど飽和する。一方共同性

心理的距離における能動表象

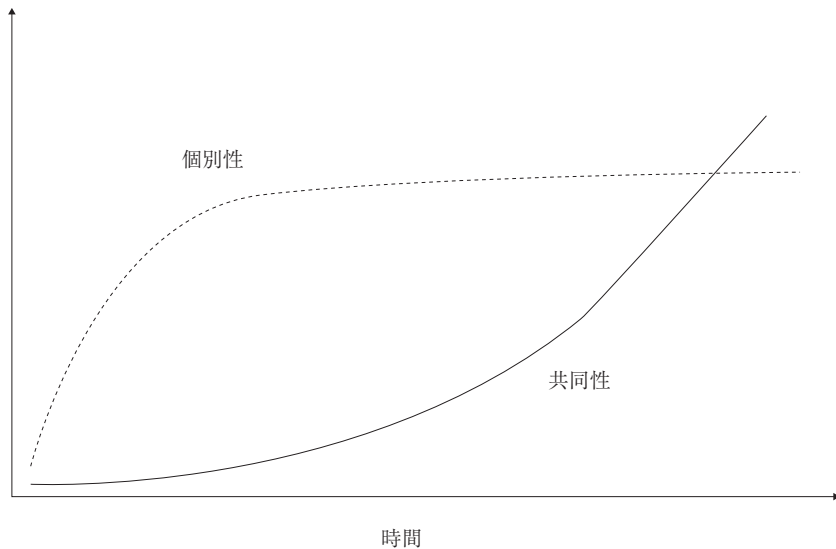


図3 接近過程における個別性と共同性の時間変化の模式図

は、遠方相においては漸増であり、近接相になると増加率が上昇する（図3）。すなわち、個別性よりも共同性の方が「近い－遠い」という距離感に相関が高いことが示唆される。そのため、能動表象過程においては、共同性成分の情感的“現れ”が、心理的距離の評定に結びつくと解釈できる。

ではその現れとして“近くに在る”とはどういうことか。まず、視覚像として大きくあるわけではないようで、個別性的存在感の経験ではないといえる。本調査レベルのごく近い他者は、そもそも表象しやすく、普段から準表象状態になっている。それは実際の空間的に近くに在る時と似た状態、すなわち視野（＝意識）内に容易に入りやすく、視野外でも気配を感じている状態といえる。そのような経験がなぜ心理的に“近い”ことになるのか。それは外在している他者の想起ではなく、心的空間内の自我の近傍に確固と“内在”しているためである（対象関係論の「内的対象」に関係するかもしれない）。ただしその他者は決して自己化されているわけではなく、いつでも他者として表象可能となっている。本調査のような格別近い他者は地（ground）化されて非主題的に現れ続けているともいえる。それに対し、距離が遠い他者は充分には内在していない（＝超越的である）ため、知覚記憶の想起という作業が必要になる。

近いことは、少なくとも「暖かさ・優しさ」を可能にするものであることから、「暖かい・優しい－冷たい」という印象次元（軸）との相関性が示唆される。この次元が実現している情態性は、「優しさ」を基準にすれば、互いの存在への関心・配慮といえる（もちろん関心・配慮が不快なまでに強くなれば「暑苦しい」となる）。自他の共同性、すなわち共に在る度合い（逆にいえば存在の間隙）として現れているのは、この“存在への配慮”といえよう（ただし個別性があるかぎり、自他の存在の間隙は0にはなれない）。内在の度合いとしての共同性とは、自己に対してと同様に、存在を配慮し続けていることである。

存在への配慮が近さの感覚の元であるとともに、それは内在として、自己の意識の一部

として生きられていることが、対象化されにくい（素朴な反省では捉えにくい）理由でもあろう。

5.2. 前反省的に距離を評定できるのはなぜか

もう1つ問題が残っている。本稿1.2の②で指摘したように、反省的態度でしか記述できない距離が、素朴な態度のまま容易に評定できるのはなぜか。

本稿でいえることは、近い他者の場合、現れた距離は視覚的というより、触覚（実感）的であり情感的であった。その情感とは、心理的距離を構成する共同性に相当する。心理的距離を意味的に構成する2次元は経験様式が異なり、個別性は情報化されるのに対し、共同性は実感される。能動表象における距離感が他者像よりも自己の実感・情感に依存するなら、距離は身体感覚と同様に自己に直接与えられた経験となり、直観的な評定は可能となる。実感は最も容易に直観され、そして最も説明が困難な経験である。

距離が遠い対象についても、遠いと直観（評定）できるのは、この実感・情感の無さという“負の現れ”によれば可能であり、それゆえ説明させると個別性の想起に頼らざるをえなくなるのであろう。

距離は実感的に現れて、直観的に了解されているが、その現れは対象化しにくい経験様式であるため、素朴な態度では本人にとっても捉えにくかった。現象学的反省を追加することでわれわれが見出したいのは、直観的に評定できる値の背後にある、素朴な態度では捉えにくい現象の本質、存在了解である。

文 献

- Berkley, G. 1948 A. A. Luce & T. E. Jessop. (ed.) “The Works of George Berkely Bishop of Cloyne”, Vol. 1, Thomas Nelson and Sons Ltd. (バークリ, G. 下条信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹 (訳) 『視覚新論』 勁草書房 1990)
- Gibson, J. J. 1979 “The Ecological Approach to Visual Perception.” Houghton Mifflin Company. Boston. (ギブソン, J. J. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 (訳) 1985 『生態学的視覚論』 サイエンス社)
- Hall, E. 1966 “The Hiddern Dimension.” Doubleday & Company, Inc (ホール, E. 日高敏隆・佐藤信行 (訳) 「かくれた次元」 みすず書房 1970)
- Husserl, E. 1922 “Logische Untersuchungen.” max Niemeyer, Halle. (フッサール, E. 立花弘孝 (訳) 『論理学研究』 みすず書房 1968)
- 下中邦彦編 1981 『心理学事典』 平凡社
- 山根一郎 1987 「心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析」 心理学研究 57 (6) 329-334
- 山根一郎 1995 「対人心理的距離のモデル化」 椋山女学園大学研究論集・社会科学篇 26 1-13
- 山根一郎 2005 『私とあなたの心理的距離』 青山社
- 山根一郎 2012 「心理的距離はどのような距離か」 椋山女学園大学人間関係学研究 10 55-65
- 山根一郎 2013 「心理的距離の動態」 椋山女学園大学人間関係学研究 11 69-80